

イノセント・チャーム

無垢なる魔性

袴田 ひなた

1

「とぉー、
「あらあたつく
まきしまむー」。
「うお…っ★」

2

ひとしきり
二人で練習した後、
小柄な身体が正面
から迫ってきた。
「おにーちゃん
おつかれさまー」



1

「はっはっは、
ひなたちゃんは
元気だなあ☆」
軽く疲労した
身体を奮い立たせ、
倒れないように
バランスをとる。

2

「おー、ひなは
まだまだげんき！」
そうは言っても、
そのひなたちゃんだつて
少なくない汗をかいている。

3

「くれぐれも
無理は禁物だよ？
集中した練習のあとは
適度な休憩、これ大事。」
「ほーい。」
布越しのくぐもった声に、
素直な返事が返ってくる。

1

…そうなのだ。
いま現在、オレの口元は
赤い布——すなわち
ひなたちゃんのブルマに
覆われるカタチになっている。

2

いつもはおへろあたりで
天使のフェイスロックが
ハマるのだが、「まきしまむ」
の名は伊達じゃないのか、
勢い余ってより上まで
来てしまっていた。

3

「…おにーちゃんは
おつかれ？」

思考が止まりかけて
黙り込んでたせいとか、
上から労わるような
声が掛かった。



1

「ああいやいや、大丈夫だよ。
大丈夫なんだけどー。」

一向に降りる気配の無い
ひなたちゃんをどうした
ものか思案に耽る。

「……………」



1

「ぶー、
おにーちゃん、
おまたの匂い
かいじゃだめ!」
鼻腔をくすぐる
甘酸っぱい香りが
——つていやいや、
何を考えてるんだ
オレは!

2

「いっばい汗かいちゃった
から……ひな、恥かしい。」
汗をかいてなければ
恥かしくないのだからうか
……いかん、さらに思考が
おかしくなってきた。

3

「いやいや!
ひなたちゃんは
甘酸っぱくて
いい匂いだよ!」
思わずそうまくし立てる
変態コーチここにあり★

1

「——ほんと？
ひな、いい匂い？」

不自由な視線を
上に向けると、
なんとも嬉しそうな
天使の笑顔があった。

2

「おにーちゃん
ひなの匂い……好き？」

「う……うん、すこ〜」

ドギマギしながら
そう答えると、頭を覆う
ひなたちゃんの両腕に、
きゅうつと力が入る。

3

「だったらひな——
おにーちゃんに
もつといっぱい、
好きになつてほしいよ」

1

「……あ……ん……♡」

肺の中全てを
ひなたちゃん
の香りで
満たすがごとく、
半ば食るよう
に
鼻から息を吸
い込む。

2

「ん……ん……」

当然ながら
吸うだけでは
生命維持活動に
ならないので、
同じように息を
吐き出すこと
になるのだが――

1
「は……っ……んあ……♡
おにいちゃん……
鼻息……すこい……」

2
繰り返すうちに、
ひなたちゃんの声が
艶かしく響き始めた。
吐き出す息が敏感な
部分を刺激して
しまっているようだ。

3
「あ……う、「こめん
……い、いやかな……？」
「……んーん、
おにいちゃんが
いっしょうけんめい
なの判るから、
ひな、うれしいよ」



1
「んあ……は……
んんっ……♡」

2
そろそろ
喘ぎ声とも呼べそうな
ひなたちゃんの声——
ずっと聞き続けているせいで、
オレのほうもだんだんと
抑えが利かなくなりつつある。

3
「んん……んん」

1

唇をすぼめ、
ひなたちゃんの
敏感なところを
狙って甘噛みを敢行。

2

「いあ……おにー、ちや……
そんなとこ……っ♡」

3

聞こえない体で
甘噛みを続ける。
時折強めに
吸いあげると、
一際高い喘ぎが
漏れた。

1

「ひゅっ……ふぁっ……」
すつかり蕩けた表情の
ひなたちゃんの
隙を見計らって、
後ろから体操着を
上まで摺り上げた。

2

「は……うお……
ひんやり……☆」
ぷるるん、と
小柄な見た目からは
想像できないほど
豊かな胸がこぼれる。
……そろそろちゃんと
ブラ着けたほうが――

3

「くすくす……
おにーちゃん
えろちーよ」
……うん、今は
その無防備な
天使を暖かく
見守ろう――
男の本能が
「野暮は言うな」
と告げていた。

1

あらわになつた
胸を、乳首を、
手指で優しく
愛撫する。

「ほ……♡
ふあ……はにゅ……
いゅっ……っ♡」

2

可愛らしい喘ぎ声が
耳に心地よく——
鼻腔を通る匂いは
女のそれに替わっていた。

3

「おにーちゃん……♡
……おにーちゃ……
ほにゅ……おまた……
じんじんするっ……♡」



1
すでに甘噛み
では飽き足らず、
舌先を使って
激しく愛撫を
繰り返す。

2
「ふわ…はわあ…
ひなのアソコ…
おにーちゃんこ
いっほいっほめられ
てるっ…♡」

3
湿って変色した
ブルマの大事な部分は、
だが決して、オレの唾液
だけでは説明できない
濡れ方をしていた。



1

「おにーちゃん……っ♡
……おにーちゃん、
おにーちゃん……っ♡」

2

他の言葉を忘れたかの
ように、繰り返しオレを
呼ばれるひなたちゃん。

3

……ふいに、
頭部から
肩にかけての
ホールドが一際
強くなり――

1

「うううう……♡」
「うううう……♡」

2

——脳を
甘ったるく
刺激する、
高い嬌声が
響き渡った。

1 「あぁ……ん」

くたつと脱力した
小柄な身体を、
上半身のバランスで
落ちないように
しっかりと支える。

「は……っ……
ふぁ……はぁ……♡」

2

「……ひなたちゃん？
だいじょうぶ……？」
充滿する女の匂いで
くらくらする思考を
奮いながら、
ひなたちゃんにそう
問いかけてみた。

3

「ほ……よ……
まもちよかつたぁ……♡」
蕩け顔でそう
のたまった天使は、
艶かしい女の笑顔を
浮かべるのだった。

1

体育倉庫のマットに
一糸纏わぬ姿で横になり、
ひなたちゃんを上
抱きかかえる。

「おー、おにーちゃんのお
ちんちん、かつちがち。」

2

「うんまあ…さすがに、
ひなたちゃんのおんな
エッチな姿見せられちゃ
なあ…」

「おー？
ひな、えっちだった？」

1

普段のあとけなさとこの
ギャップはけっこうなもの
があった——そう告げると

「はにゅー、ちよつと、
恥かしい★」

ともすれば、こういう
恥じらいの表情も
珍しいのだけど。

2

「つまりはこれから、
ひなとおにーちゃんは
えつちをするわけですなー!」

なんだか他人事のような
言い方だが、何をどうするのか
ちゃんと理解してらしく、
天使の笑顔でひなたちゃんは
言うのだった。

3

「それでは
おにーちゃん、
どうぞ
ひなの中に
おいでください!」

1

「んゅ……んゅ……」

ひなたちゃんが
慎重に腰を落とし、
屹立したペニスに
少しづつ秘所を
押し分ける。

2

「ゆっくりでいいよ……」

痛かったら無理

しなくてもいいから……」

労わるように背中を
撫でながら、
耳元でそう囁く。

3

「お……だい……
じょーぶ……」

その言葉とは裏腹に
苦しげな表情の
ひなたちゃんだが、
着実に結合は
深くなっていた。

1

やがて——
ペニスの先が
膣奥に当たる
感触を覚えた。

「…お……
ぜんぶ……
はいつた……☆」

2

涙目になりながら、
どろろが誇らしげに
ひなたちゃんが
つぶやいた。

「うん……すごい……
ひなたちゃんの中……
すごいキツくて……
あつたかいよ……っ」

3

「ひなの中、
きもちいい？
おにーちゃんが
きもちいいなら、
ひなとつても
嬉しい♡」

「ああ……
気持ちいいよ……
すこ☆」

1

ひなたちゃんの息が
落ち着くのを待つて、
少しずつ抽送を
開始する。

「んっ……んっ……♡」

2

初めてのはず
なのでもう少し
痛みがあると
思ったのだが、
思いのほか平気
だったらしく、
早くも声に艶が
混じり始めた。

3

「ふぁ……おにーちゃんの
おちんちん、出たり、
入ったり……きもちいい……♡」

とろんとした表情で、
快樂のままに身体を
動かす魅惑の天使(?)

1

——実は心のどこかで、
ひなたちゃんの意外な
表情を見たいと欲する
気持ちを感じていた。

2

「…それじゃ、
「ごちはどお
…かな？」

そう言つて、
左手の指をそと
そこに宛がう。

3

「…おー？
おにーちゃん…？
そこは、その、お、
おしりの穴…ですよっ」

4

さすがに羞恥が強いのか、
普段はなかなか見ない
戸惑いの色が愛らしい顔に
はつきりと浮かんでいた。

素早く愛液を
搦り取り、指に
絡めるや否や
乱暴にならない
よう一気に菊門に
潜り込ませる。

1
「ひゅ……ん!!
ん♪おん……ん★」

2
「ふぁ……や……★
おに……ちゃん……ご」

3
おしりに異物が
挿入される感覚など
それこそ初めての
驚愕と言つてもいい
表情のひなたちゃんが
そこに居た。

4
「Hi♪お……ん……★
ん♪おん……ん……ん……」
心なし苦しげな顔に
興奮を覚える反面、
押し寄せるのは津波
よりも高い罪悪感。

1

「は……あう……んっ
……ふ……ああんっ♡」
——と、思っていたら、
程なくして
またしても喘ぎに
艶を含んできた
ではないか。

2

（ああ、まあそっか……
ひなたちゃんは
こっぴつこのけつこさ
慣れちゃうタイプ
なんだよなあ……）
体躯的に、スタミナは
地道に付けるしかないが、
順応性と吸収力は
チーム随一である。

3

（こっぴつこのけつこさ
再認識するあたり——
最低のコーチだなあ……★）



1

沈みかけた気分を
煽るかのよう
ひなたちゃんの
ふくよかなおっぱいが、
目の前でリズムミカルに
弾んだ。

（ああオレはコーチだよ…
でもなあ、その前に、
男、なんだよおお……！）

2

3

心で叫びながら、
揺れる胸に
舌を這わせる
ダメ男なのだった。
「ひあ……あん……♡
おに、おにーちゃん
……あつ……♡」

1

「はいっ……んん……
はっ……んん……っ♡」
腰を突きあげるたびに
甘い喘ぎが迸る。

2

「はっ……んん……んん……
……んん……っ♡」
それに合わせて
菊門に挿し入れた
ままの指を動かすと、
異なる響きの
吐息が漏れた。

3

「おにーちゃん……っ♡
……ひな……とつても、
ふわふわ……うて……
ふぁ……♡」



1

互いを食べるように
激しくなる律動に合わせて、
見た目に反した豊かな
胸が大きく弾む。

「いああ……ああ……♡
おにーちゃん、もつと……
もつとひなのおっぱい
吸ってえ……♡」

2

揺れる乳房を
逃がすまいと、
夢中で乳首に
むしゃぶりついた。

「はあ……う……♡
おにーちゃん……う
……おっぱい……
きもちいいよ……
おにーちゃん……う……♡」

1

そろそろ限界が
近くなってきたので、
腰と指と口と、
全てを総動員して
ひなたちゃんを
攻め立てる。

2

「はいっ……
ふ……ん……ん……♡」
だらしなく開いた口から
涎をたらしながら、
言葉にならない喘ぎを
繰り返すひなたちゃん。

3

「いわ……はっあぁ……♡
おに……ちゃ……
おい……ひゃぁん……♡」





1

「……おー……♡
ひなの中、おにーちゃんの
せーえきで……♡」

2

とどまる事を
忘れたかのように、
結合したまま
白濁液を吐き出し
続ける我が息子。

3

「……ごめん、
ガマンできずに」
なか
膣内に出しちゃって……」
「……おー？
おにーちゃん、
どーして謝るの……」

1

「ひな、とつても
気持ちよかった
おにーちゃんも
気持ちよかったから、
ひなの中にいっぱい
せーえき出してくれたよ」

2

「だから、なんにも
謝ることはなごのです。
いっしょに気持ちいいのは、
ひな、とつても嬉しい♡」

3

あまりにも真っ直ぐに
紡いでくれた言の葉は、
天使の至言とでも
言うべき輝きを伴って、
オレの心に深く染み込んだ。



1
「おにーちゃん、
責任を、
とってくださーい。」

小柄な身体を
抱きかかえながら
行為の余韻に
浸っていると、
ひなたちゃんの
口から衝撃的な
言葉が飛び出した。

2
「…のあ…っ!?
ひ、ひなたちゃん、
そ、それは…う!」

確かに天使の純潔を
奪ってしまった以上、
責任を享受するのに
吝かでないのだが、
唐突と言えば
あまりにも唐突で—



1 「ひな、おしりで
気持ちよくなりたい。」
「……………」

2 衝撃と狼狽の
渦中にもじもじと
恥じらいながら
告げられた言葉を
理解するには、
それなりの時間を
要した。

3 「おにーちゃんが
さっきおしりに…
したのが、
気持ちよかった
…から」



1
こんなに困り顔の
ひなたちゃんも珍しい。
羞恥もあつてか、
愛らしい顔は耳まで
真っ赤になっていた。

「おにーちゃん…
だめ…?」

2
責任というのはつまり、
アナルの快感に
目覚めてしまったので
そこで満足させて
欲しいとーむむ?
…それはそれで
大きな問題がー。

3
「ぶ、おにーちゃん
いじわるさん☆」
スネた。
ちよーかわいい。
「ああいや、
うん、ええと…
ひなたちゃんさえ
良ければ☆」



2
愛液でよくほぐした
菊門に、屹立した
ペニスを押し当て、
少しずつ中へと
押し進める。

1
「ゆっくりいんから…
力抜いてね…?」
「お……だいたいよーん
おねがいます
おにーちゃん…♡」

3
「んっ…っ
うぐっ…」
苦しげな喘ぎが
漏れる…が、
静止の言葉が
出ない以上は
そのまま続けると
約束していた。



2
いきなり
無理をさせるのも
どうかと思うので、
肉棒が半分ほど
埋まったところで
挿入を止める。

1
「っはっはっは……」
「はあ……っは……」
「……きゅ……」
「ひなたちゃん……」
「だいじょうぶ……っ」

3
「は……っは……っは……」
「……っは……っは……」
「……っは……っは……」
息も絶え絶えに
言うものだから、
罪悪感がハンパない。
「っはなれば——」



1
「んあーあ……？
……いあん……
おー！ちちゃん♡」

2
多少でも、
快感で苦痛を
紛らわすことが
できればと、
ふくよかな
おっぱいを優しく
愛撫してみた。



1 「……おにーちゃんのおっぱい……おっぱいで……おっぱいがくっつく……やさしい……♡」

2 「……ひなたちゃん落ち着いた？」
まだ少し涙声だが、
悦びを含んだ
声音になったので
耳元で
ささやいてみた。

3 「うん……
おにーちゃんのおっぱい。
おかけ。
おにーちゃんは……
いつも、とっても
やさしい♡
……そんなやさしい
おにーちゃんが、
ひなたは……
大好き……♡」



1 「んっ…ほあ…は
…はにゅ…んっ…は
ゆっくりと…きんぐ
繋がったところを
出して、入れて—

2 「あ…っあ…っ
は…んああ…っ♡」
アナルの快感に
目覚めたというのは
間違いなさそうで、
抽送をするたびに
甘い喘ぎが
漏れ聞こえる
ようになった。



1 「う……う……
うあ……！」

——などと
冷静に状況を分析
できてるわけもなく
締め付けの強い
アナルの刺激は、
オレ自身の思考を
翻弄していた。

2 「は……ん……
ふ……っ……♡」
せめて先に果てる
という愚を避けるべく
ひなたちゃんの胸を
今度は強めに愛撫する。



2 「んう…おにい…
ちゃん…っ♡
きもちい…よあ、
おしり、すこく
きもひいい…っ♡」

1 「はあ…♡
ふあ…ほじゅ…
んああ…んっ♡」
ひなたちゃん
の
声
が
明
確
な
快
感
の
響
き
を
含
み
始
め
る。

3 しどろに溢れる
愛液が潤滑剤となり、
菊門への抽送は
かなり激しいもの
なっていた。
「うん、オレも…
オレも気持ちいいよ…う
…ひなたちゃんのおしり、
キツく締め付けて…
最高だ…っ！」



1 「おにーちゃんも…っ
…きもちいい…っ？
ひな…うれしい…っ♡」

2 答えるかわりに、
痛くならないよう
注意しつつ、
乳首を強めに
摘み上げた。
「ははゆうっ…んっ♡
おっぱいの
さきうちよも…っ
すく…っ…っ…っ
すく…
きもち…いい…っ♡」

3 歓喜の喘ぎを
迸らせながら、
オレもひなたちゃんも、
懸命に快楽を求めて
腰を律動させる。
「ああ…っ♡
ふあ…ひな、また、
ふわふわっ…っ…
なっちやっ…っ♡」



1 「きざっ…うっっ♡
はゅっっ…うっっ!!」

2 一際高い
喘ぎ声とともに、
ペニスを包む粘膜が
強く引き絞られる。
「あう…く…
うああ…っ！」

3 肉棒を引き抜く
暇もなく、
こみ上げてきた
射精感に任せて、
白濁した欲望を
腸内へと解き放った。



2 「ほあ……
おにーちゃんのおちんちん、ひなのおしりの中でまだびくびくしてる……♡」

1 「ほあ……♡
結合した部分から、納まりきらない精液がとめどなく溢れ出る。

3 「えーと……それはその……気持ちよかったの……」
言い訳にすらなっていないそのまんまの感想を、バツが悪そうに垂れ流す★

1 「…おー、それじゃあひなといっしょよ、ひなも、とっても気持ちよかった♡
おにーちゃんといっしょはとってもうれしい♡」

2 本当に嬉しそうにそう言ってくれたので罪悪感に苛まれる自分が逆に情けなくなってきた。
「っん、そーだね…オレも、一緒に気持ちよくなれて、すく…うれしいよ」

3 「…ひなは今、とっても幸せなので、ありがとー、おにーちゃん♡」
天使の微笑みが、至上の幸福感をもたらしてくれる。オレは、やさしく力強く…
ひなたちゃんを抱きすくめた。

4 「ひな、もつと、いろんなこと覚えて、おにーちゃんを、身も心もトリ」に、しちゃうのですよ」
…最後に宣言された誓いは、「無垢なる魔性」の面目躍如たるものだった—

